
けいおん!! ~Unlucky? but Happy! ~

テイケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！！ ～Unlucky? but Happy!～

【Nコード】

N4414U

【作者名】

テイクン

【あらすじ】

楽「『けいおん!』沿いの学園もの。気軽に見てやってください。超超超超駄文ですが」

作者「ちよっ、ヒドくない!?!」

『けいおん!』の二次創作。ちよっとツイてない主人公、ひつな筆南がく楽が共学となった桜ヶ丘高校で得たものは…。

学年は梓たちと同学年、恋愛要素は…あり！

プログラマーとしてなった（前書き）

初めて投稿させて頂き、Takennと申します。よろしくお願
いします。

ブローグ〜どうしてこうなった〜

……小さい頃、よくは覚えていないが、ハマっていたアニメがあった。ヒーローが悪者をやっつける、とまあ所謂ありがちな話だった訳だが、それはどういう訳か俺の心を惹きつけた。何年も前の俺の思考をトレースするのは難しいが、察するに、おそらく当時の俺の思いは、こうだ。

『ヒーローになりたい』と。

まあ過去の話だが。

小学校、中学校と、陰険な嫌がらせ、いじめ、なんてものは沢山見てきた。世の中が正義と悪のたつたふたつに別れる訳で無いことも知っている。どちらにも非はあって、どちらにも言い分はある。そんな簡単なものじゃないのだ、この世界は。

長くなった。しかし、今、ひとつだけ言えることがある。

「どうして…どうして…こうなったあああっ！」

40人のクラスの内、只一人の男子、俺こと、筆南 楽は叫んだ。

オリキャラ紹介〜ツイてない男〜（前書き）

モノローグだらけのプロローグを見て下さった読者の方々、本当にありがとうございます。

さて、今回はオリキャラ紹介です。

随時更新していく予定なので、たまに見てっして下さい。

オリキャラ紹介〜ツイてない男〜

名前：筆南 楽

読み：ひつな がく

身長：170cm

体重：57kg

一人称：俺

パート：？

容姿：黒っぽい茶色の髪に黒い目。癖っ毛の為、髪が立たないようにワックスを使用している。顔はイケメン ではないが、格好いいか格好悪いかと言われるれば格好いい。

特徴：ごく普通の男子高校生であるが、なかなかツイてない。某上条さんぐらいツイてない。

性格：ノリは軽く、ボケもツッコミも担当。基本的にこの軽いノリの語りで物語は進む。また、正義感が強く、フェミニストでもある。成績：上位だが、努力量に大きく左右されるため、根っからの才能はない。

運動：球技基本的に苦手。球技以外は得意。

過去：昔、トラウマになる程の壮絶な事件があり、心に大きな傷が

……ない（笑）

しかし、彼は覚えていないが、昔、とある人物に出会った事により、正義感が強い今の性格になる。

内容増えるかもです。

一応こんな感じの野郎ですが、生暖かい目で見守ってやってください。

オリキャラ紹介〜ツイてない男〜（後書き）

次回から本編です。

Story 1 - 1 『回想』 くなんでやねん (前書き)

プロローグ2です。

Story 1 - 1 『回想』 ～なんでやねん～

俺が桜ヶ丘高校1 - 2教室で絶叫している理由を語るには、少しばかり時を遡る必要がある。

朝。

長かった受験シーズンを何事もなく無事に（ここ重要な）終え、晴れて高校生となった喜びを噛み締めている俺は、土日明けの高校生活一日目をどう楽しもうかと、ポジティブに起き上がった。枕元のデジタル時計を眺める。7時59分。

「……………」

もう一度眺める。じつくりと。

あっ、8時00分00秒になった。やったー。

「……………って!」やったー!」じゃねえ!脳天気にも程があるだろ!」

俺の家から高校までは約30分かかる。門限は8時20分。ご覧の通りまだ起きたばかり。飯食ってない。着替えてない。寝癖直してない。うがー。

「だから!」うがー!」じゃねえ!現実逃避すんな俺!」

俺はベッドから跳ね起きると、急いで着替え始めた。

「くそう、何でアラームが鳴らないんだ!」

見ると、9時にセットされている。遅刻する気満々だなオイ。仕方ないので、愛用しているチャリの“チャリー”を使うことにした。「全く、ツイてねえ！」

「だからですね、あの目覚まし時計と自販機が悪いんですよ、先生」

「いや、間違いなく君と君の自転車がいけないだろう」

「チャリーを悪く言うんじゃない！」

まさかもっとツイてないことが起きるとは思ってたなかった。今俺は桜ヶ丘高校の職員室で正座させられている。遅刻したから？まあそれもあるのだが、もうひとつは…

〈回想〉

気持ちのいい日差しを浴びながら、朝特有のピリツとした涼しい空気のなかを颯爽と駆け抜ける。

ずいぶん遅刻ギリギリかと思っていたが、腕時計を見るとまだ余裕はあった。流石チャリー。期待を裏切らない。

「これは大丈夫かな」

なにやら死亡フラグがたった気がするが、気にしない。

腹が減っている。当たり前だ昨日の晩から何も飲み食いしてないのだから。

「ん？」

自転車を走らせている道の端に、自動販売機を発見した。時計をチラッとみる。余裕はある。何か飲もうと、財布を取り出した。

さて、俺こと筆南 楽は基本的にツイてない。今までのパターンから言っと、シチュエーション：自動販売機でジュースを買う に置けるアンラッキーイベントは

? こういつ時に限り1円玉、5円玉、5000円札しかない。(以後、家をでる前に小銭チェックをするようになった)

?金を落とす、しかも拾えない場所に。(以後、金の扱いは非常に慎重になった)

?釣りが出て来ない。(以後、財布の中身は殆どが10円玉が占めている)
その他多数…。

「しかし、」

俺は呟く。

「過去の数多くの経験から、もう失敗はしない」

8割小銭で重くなっている財布から10円玉を超慎重に取り出す。目標物は140円のスポーツドリンク。10円を丁寧に…くそっ手が震えるな…入れる。チャリン。もう一枚…チャリン。14枚無事に入れ終わると、スポーツドリンクのボタンを押した。

どうやら当たり付自販機（当たればもう一本！）らしく、スロットが回る。

まあ当たらないのは承知の上、少し待つ。時計を見ればそろそろマズい。ジュースは学校で飲むしかないだろう。まだスロットは回っている。

「いや、遅くねえ？1分は経ちましたよ、ねえ!？」

俺も自販機に金入れる時に結構時間食ったけど、そんな俺への当てつけですか!？

マイペースに回り続ける賭博円盤に悪態をついていると、漸く止まった。軽やかな電子音がする。これはまさか…!

「『大ハズレ』デス」

「は?」

啞然とする俺を余所に、一仕事終わったと言わんばかりの自販機（性悪）は再び、『販売中』の文字を怪しく光らせてまた別の客を求めている。

『大ハズレ』だから、俺にジュースはくれないらしい。ふーん。

「なんでやねん!!これぼったくりじゃねえか!」

怒りをぶちまけたくも時間はギリギリどころかほぼアウトライン寸前だ。

悔しさを堪えながら、ギア6のトップスピードで俺は桜ヶ丘高校校門に向かって走った。

今回の教訓：当たり前付き自販機には手を出さない

〈回想終了〉

「…というわけです先生。お分かり頂けたでしょうか」「…その後君が怒りの余りか何か知らないがそのプロもびっくりなトップスピードを維持したまま校内に突っ込んで来たことに対する弁明は？」

「……………」シーン

「さらにそのままブレーキが効かないとかなんとか叫びながら、あの、胸像に激突して胸像が大破したことに對する謝罪は？」

「……………まっこと申し訳ございません！お願いですからしよっぴかないでええ！！」「ドゲザ-

いや、本当にツイてなかったんだって！マジでブレーキ効かなくなつたんだから。まあ確かめようにも、胸像と一緒にちゃーりーも逝つちやつたけど（泣）

「……………仕方ないねえ。今回は見逃してあげるよ。ただし、後処理は手伝って貰うからね」

その程度で済むなんて…

「先生！ありがとうございます！」「ガシッ

「抱きつくなっ！分かったから、早く教室に行きなさい。ちよっど

自己紹介でもしているところだろう」

「はい、分かりました」

ほんとにいい先生で助かった（チャーリーを貶した以外は）。救われた俺は、1 - 2に急いだ。

やっと一件落着？いやいや、大変なのはこれからだった。

Story 1 - 1 『回想』 くなんでやねんく (後書き)

まだ「けいおん！」メンバーが出せない…。

次こそ出します、多分、きっと、恐らく。

感想もお待ちしております！ユーザーでない方でも書き込み可能ですので、よろしく願います。

Story 1 - 2 『災難』 く違うだろく (前書き)

何がなんだかわからない……。

深夜のテンションで書きました、どうぞ。

Story 1 - 2 『災難』 く違うだろ

古き良き、というべきだろうか、今時珍しいであろう木でできた廊下の床を踏みしめ教室に向かっていく俺である。

開け放しの窓からは春風と共に桜の花びらが舞い込んでいる。ふう、と溜息をつく俺は入学試験の日を思い出した。

あの日は、空が自分の個性色を最大限に発揮し、負けじと太陽が己の存在理由を証明すべく燦々と下界を照らし、雲はその戦いに付き合いきれんとばかりに姿をくらます。結果として3月なのに25と、冬を突破したばかりの身としては猛暑日と言ってもいいくらいの茹だるような暑さを感じる日となった。

18

実は俺は親の仕事の都合により、よりもよってこんな時期に引越し、となってしまうていた。無論不意打ちである。

俺の文句を言う隙すら与えずに引越し準備は完了し、桜ヶ丘に着したのは約2週間前。出願書は締切ギリギリで親が出していたらしい。

もっと早く俺に伝えろや、と言いたかったが、向こうも急に転勤が決まってしまい、色々と手続きをして忙しいうちにすっかり忘れていたらしく、

かくして俺は、己の運の無さを嘆きつつ桜ヶ丘高校の過去問を解いていた訳だ。

当然その2週間は自分の部屋に引きこもり放しで、狂ったように設問パターンを飽和状態の頭に無理やり叩きこんでいたので、25の焼けるような暑さは五教科英・数・国・理・社の知識をじりじりと蝕んでいた。

到着してからのことはあまり覚えていない。ただ県外からの受験だからなのか、一人寂しく別室受験だったのは覚えている。

そこから約1週間経ち（そこでも色々トラブルに巻き込まれたが割愛する）、合格発表。

何か忘れませんか？と言わんばかりにツイてない出来事が俺を襲った。約ひと月後にも　つまり今日だが　やってしまうことである、遅刻。そういえばこの日も目覚ましがずれていたのだ。

まあ正確に言えば合格発表に遅刻も何もないのだが、せっかくだから開示と同時に見たかった……。

結果開示からおよそ一時間ほどずれた時間に俺は家を出て、おそらく発表を見て来たのである。う学生たちの進行方向に逆らうようにして桜ヶ丘高校に向かっていた。そして校門から一步入った俺は、

「ひどくござつぱりしてるー！」

某聖徳太子さんみたいな感想を発すこととなった。

ただでさえ広い私立校の敷地に、一時間もずれ込んだのだから、も

う人もまばらとなっており、先ほどまでは大人気スポットだったであろう掲示板の前も既にブームは過ぎ去っていた。

いや、賑やかなのがいる。耳を傾けると、

「いやあ流石は憂だね。私の妹だけあるよ」

「そんな、お姉ちゃんってば言い過ぎだつて／＼」

「まあ、漣と違って結果見る前から落ち着いてたしな。去年の漣なんて…イタツ」

「その話はするなああ!」

「(ぼわん)」

合格したのだろう、短めのポニーテールを結んだ女の子を囲んで、似たような顔をした女の子(会話からしてポニテの子の姉、妹に抱きついている)、

カチューシャをしてデコを丸出しにしたはつらつとした表情の女の子(何か言っている)

黒髪ロングにややつり目の所謂大人の美人と言った感じの女の子(顔を真っ赤にしながらデコの子の頭に拳骨を落としている)

クリーム色のウェーブのかかった長い髪に、眉毛の女の子(それら

のやり取りを見て、何故かうつとりしている)

という個性的な集団が出来上がっている。個性的だが、何か見覚えがあるような…気のせいかな。

まあ仲睦まじい様子で実によろしい。よろしいのではあるが、もし今来たのでないならば、もしかして約一時間ずっとこれをやっていたのだろうか？

会話の続きを聞くに、先ほどの内容が表現を替わっただけでループしているところからして、そうらしい。

相変わらず一組は抱きつき、また一組は何やら言い合っており、約一名がたまらない、という表情を浮かべている。

「あの〜、」

普段から見ず知らずの人たちに話し掛けるほどフランクな訳ではないのだが、誠にツイてないことに俺の受験番号は(有るとしたら)彼女たちの後ろにあるようだ。仕方なく声を掛けた。あくまでも、自然に、自然に。

「すいませーん」

めがっさ声裏返った。

やっちまった。

当然気付いて居なかった彼女たちはビクツと肩を震わせ、小動物もかくやと言った感じで振り返る。

これはなんか弁解しないとまずいな。

「あー、えとー、そのー」

何も言葉が出てこねえ！さっきまでのモノローグどうした！？無駄に情景描写やってる余裕があるなら、今こそ言葉を発せ、マイマウス！

未曾有の大ピンチに俺が頭を抱えて唸っていると、

「えっと、どちら様でしょうか」

先ほどなんかうつとりしてたクリーム色の髪の人が話し掛けてきた。

「ああ、俺は筆南 楽と言います」

よし、ちよつと落ち着いてきたぞ。

「良い名前ですね。私は琴吹 紬って言ってます。ムギちゃんって読んで下さい」

初対面であだ名か…しかも『ちゃん』付け…

「ムギさんもこちらの学校で？」

これなら良いだろう。

「はい、実は今年から二年生なんですよ」

先輩だったのか。

「同学年だと思って、失礼しました」

「いえいえ、構いませんよ。高校でも会ったらよろしくお願いしますね」

「はい、高校でも……」

……。

「?どうしました?」

はい、ここで問題です。

Q・今日俺は何をしにここに来たでしょうか?

A・楽しいな雰囲気の子の集まりに突然声を掛け、怯えさせた拳げ句、その中の先輩とあだ名で呼ぶほどに仲良くなる。

はい、正解。正解者には景品として……って、

「違うだろ!?!」

「ぴいつ!?!」

ほんとの正解は

A・俺がこの桜ヶ丘高校に受かってるか、スベってるか確かめに来た。
でした。

急に叫びをあげた俺に驚いているムギさんに謝りつつ、俺は結果が書いてある掲示板に近づいた。

つまりそれは、俺が（不本意ながら）怖がらせてしまった人たちにも近づくとということだ。

不審者が近づいてきたら誰だって嫌だろう。って誰が不審者だ。

まあ、彼女たち（ムギさんは除く）は俺をそのくらいの恐怖の対象に感じているらしく、先ほどの組合せ、仲良しそっくり姉妹

と、

黒髪ロングのべっぴんさん（死語）とデコカチューシャさんの、

二組でそれぞれ震えております。

ああ、罪悪感がふつふつと……。

しかし、結果を見ない訳にはいかない。俺が緊張のあまり普段はしない真剣な顔をして（彼女らの震えはいつそう大きくなった）、一歩一歩近づいていく（彼女らは一歩一歩下がっていく）と、

「お姉ちゃんに何する気ですかっ!?!」

「溼に手を出すなっ!?!」

ええー!?!?

急に、抱きつきあってた姉妹の妹さんと、

デコカチューシャさんが俺の前に立ち塞がった。

「ちょ、ちょっと退いてくださいよ」

結果が見えない！

俺は結果が見たいんだ！

「お姉ちゃんを狙うなら、代わりに私にして下さいっ！」

「溇のところに辿り着きたいなら、あたしを倒してから行けっ！」

えええー！？

「いや、見ただけなんですって（結果を）！」

この言葉が（間違った）正義に熱く燃える彼女らの怒りに油、いやガソリンを放ってしまったらしく。

「やっぱり（お姉ちゃんを襲おうなんて）許せませんね……」

「（溇のあんなところやこんなところを）見たいなんて……やはりそんなやらしい気持ちで近寄ってきたんだな、この狼め！」

ええええー！？

二人の背後に鬼神が見えるっ！？

「んまつ、ちょっ、違う、君たちはなんか勘違いしている！」

「……（カチツバチバチバチ）」

「……………(ジャキジャキツ)」

無言だ…。

話聞く気ゼロか！

「ちよつとそこの妹さん、アナタどこからスタンガンなんて取り出したんでせうかつ？あとそこのカチューシャの方、ドラムスティックは暗殺武器じゃない…って危なっ…！」

俺の首筋に向けてドラムスティックが、

俺の俺たる象徴に向けてスタンガン(多分出力最大)が、それぞれ突き出される。

ギリギリでかわして距離を開ける。

恐えええ！怖えええ！

最近の女子校生ってこんなに戦闘スキル高いの！？

攻撃方法もえげつないし！

普通逆だろ！！下にスタンガンはいくらなんでも…いや逆でもヤダけどね！！

多勢に無勢、こうなったら、

Help me, MUGISSANNNNNN!!

振り返り、右腕を高く振り上げる！！

ムギさんは…

「笑ってるー！それはもう天使のような笑顔だー！」

あの人、大物だ…！！

さて、武器を持つ戦士を前に背中を見せているこの状況が非常に隙だらけである、と俺が気づくのは、背中にスティックの二連撃、首に高圧力の電撃を食らい、視界が真っ暗になっていく時であった。

言うまでもなく、ツイてなかった。

Story 1 - 2 『災難』 く違うだろく (後書き)

読者の皆様「終わり方ああ！何時まで回想シーンなんだよっ！？」
駄作者「すみません、仕様です（私の）」

反省点：

ギャグパートが上手いかなかったです。特に入り方がなあ…。

感想、アドバイス、今日の一言、などなど、ありましたら感想に書き込んで下さい。

ではまた！

Story 1 - 3 『到着』 くという夢を見たんだ (前書き)

少しストーリーラインに変更があったため、オリキャラ紹介にも変更を加えました。見ておいて下さい。

Story 1 - 3 『到着』 くという夢を見たんだ

視界が暗くなっていく……

すると再び視界が明るくなった。死んじまったのか、まさか？

いや、死んだにしておかしくない。

目を開けると、薄暗く、雨が降っていた。

俺はその雨によって作られたであろう水溜まりの中に倒れていた。

やはりおかしい。さっきまで空はうざったいほどハレ晴 ユカイだったはずだし、まず倒れている場所は桜ヶ丘高校のただっ広い中庭ではない、小さな、公園だ。

何でだ？何故ここにいる？

ここは、

俺が桜ヶ丘に引っ越して来る前に住んでいた町の、公園……？

疑問符しか出てこない。何故俺はここにいる？何故俺は倒れている？そして……

何故俺は、泣いている？

涙と汗と雨で滲む俺の視界に、何人かの靴が近づいて来て、

俺は再び気を失った。

という夢を見たんだ。

ってことらしい。また目を覚ますと、そこは紛れもなく桜ヶ丘高校の中庭で、仰向けに転がってた俺の顔を除きこむように、ムギさん含む、女子6人が心配そうに見ていた。
ああ、これは今度こそ、

「死んだか……」

「「何でだよっ！」」

黒髪ロングの子とデコカチューシャの子が俺にツッコむ。(さっきから『子』で認識してるけど、多分この人たち先輩だよな……)

まあいいや。気絶していた俺を無視して帰らなかった所を見ると、ムギさんがフォローしてくれたらしいな。
じゃあとりあえず、

「何か言う事は？」

「「「ごめんさい〜」」

「よし(可愛いから)許す」

「「「軽っ!?!」」

だって、あんな上目遣いで謝られたら許すしかないじゃないか。

「ふふふ、計画通り…」

「やはりデコは許さん」

「何い！？だれがデコだっ！」

そこかよ。

その後、誤解を解き、仲直りし、全員の名を聞いて、

ふう〜やってきました合格発表。

番号は281。さて、結果は…

唯さん（姉妹の姉の方。）と、

澪さん（黒髪ロングの人。何故が顔が赤いし黙りこくっている）が
掲示板の前から動けば、合否が分かる。

唯さんが真剣な面もちでこちらを見ながら、

澪さんが相変わらず赤面して目をそらしながら（いい加減こっち向
いて下さい、心折れそうです）、
そろそろと動き出す。

しかし、

「ちょっと待って！コワイ！まだ心の準備が出来てない！」

「ええっ!？」

だってだって、女子高生2人とバトルした上に気絶させられ、今さつき目覚めたばかりかだよ？準備OKな訳がない。

俺に動くなと言われた2人は居心地悪そうにしている。
スイマセン、もう少しですから。

俺は後ろを向き、大きく、深呼吸をする。すう、はあ。

よし、落ち着いた。

俺は、不安を振り切り、勢いよく振り向く!

既に気を利かして退いてくれていた2人のおかげで、真っ直ぐに掲示板が目に入った。

278、279、280、

281。

合格だ。
だが、ここで諸手を上げて喜ぶほど俺は子供ではない。あくまでも、
落ち着き、クールに、大人のリアクションをだな……

「いゝやつほおおおおおおおおう……！！！！！！！！！！」

「……………声でかつ……………！！！！！！！！！！」

やったよ、やったよ俺！やりましたよ！合格しましたよおお！

喜びにうち震える俺に、律さん（デコカチューシャさん）が声をかける。

「いやゝ良かったな、楽「ありがとうーう！」わひゃあ！何すんだよ
う／＼／」

気づけば抱き付いてました。

その後、漣さん以上に真っ赤になった律さんにまたドラムスティックでボコられたのは別の話。

〈回想終了〉（お疲れ様でした）

んで、あの後そのまま皆一緒に帰ったんだっただな。
それにしてもあのステイック捌きは見事だった。

ずっと廊下を歩き続けて来た俺の足が止まる。

1 - 2 教室前。

さてさて、なんて自己紹介しますかね。

数分後、冒頭の通り絶叫する羽目になる事を、俺は、まだ知らない。

Story 1-3 『到着』 くという夢を見たんだく（後書き）

なんか色々と（特に律ファンの方々）すいません。

成り行き上、ああなっちゃいました。

律を恋愛対象にする気はないので、あしからず。

感想、アドバイス、誤字脱字、オススメのコンビニスイーツなど有りましたら、お気軽に感想に書き込んで下さい。

ではまた！

Story2 『始まりは』 く結婚して下さいく (前書き)

時間かけた割にグダグダ具合が増しています。

ごめんなさい。

Story 2 『始まりは』 ～結婚して下さい～

威勢よく気合いをかけたは良いものの、1 - 2教室前で固まり早五分。教室の中からは扉ごしに小さく自己紹介の声、拍手、自己紹介、拍手……。

何というか、まあ、

入りづらいんです。

分かってはいたさ、分かってはいたんだが、気まずいというか。

「ふ……」

廊下はシーンとして、外からは鳥の鳴き声が聞こえるのみ。

扉に背中をつけ、もたれかかる。

廊下を吹き抜ける風が頬にあたり、気持ちいい。

俺は、これからどんな高校生活を送るんだろうか……。

花びら、綺麗な桜の花びらが舞い込む。それを右手で掴んでじっくりと眺め……

俺は後ろ向きにひっくり返った。

《梓 視点》

3月の合格発表の日からずっと楽しみで仕方なかった高校生活。

今日はその記念すべき1日目、なんだけど……私のすぐ後ろの席は空いている。

遅刻だろうか？

先生は何故かノーコメント。

今クラスでは自己紹介の時間が終わり、みんなそれぞれ近い席の人と話している。先生は自己紹介の少し前に慌てた様子で職員室に行ってしまったので、自由時間のようなものだ。

周りを見渡して、気づく。

一人になってる。

何人かずつ、既にグループは出来始めていて、なんだか混ざりにくい。

悪気はないんだろうけど。

「はあ……」

後ろの席の人がいたらまだ違ったかもしれない。

まだ見ぬ欠席者を心の中で恨みながら、居づらくなってきた私は用を足しに行こうかと教室の扉をガラガラと開けた。

《楽 視点》

しばしの無重力体験。
扉が開けられたのだ、と思い当たったのはそのコンマ一秒後。
分かっていても、崩れた体勢は直せない。

「うおおおう!？」

俺は受け身もとれず、床に頭をしたたかに打ちつけた。

《梓 視点》

たった今、私の足元には一人の男子生徒が転がっている。
ドアに寄りかかっていたのだろう、開けた瞬間に倒れ込んできた。
変な声をあげながら。

「うおおおう!？」

「ええええっ!?!」

避けただけ。

ゴチン!

と痛そうな効果音と共に彼は頭を打ち付けて、

今に至る。

もしかして、私の所為?

申し訳無くて、近寄って覗き込む。

結構整った顔立ちだ。

後頭部を抑えて唸ってさえいなければ。

「あの、大丈夫ですか?」

《楽 視点》

「あの、大丈夫ですか?」

目の前に天使が。

「はい、大丈夫です」

「ちよっ!?!鼻血!鼻血吹いて下さい!」

大変だあ、と慌て始める天使、改め小さいツインテールの美少女。
可愛いな。

「俺は筆南 楽です」

「唐突すぎる自己紹介だ！」

「結婚して下さい」

「そしてまたも唐突すぎるプロポーズ！」

「本気なんです！」

「だとしても今言うことじゃないです！そして答えはNOです！」

「あああああ！振られたあああああ！」

「ちょっと！頭振らないで！鼻血をまき散らさないで！」

そんなこんなで。

思い返せば、これが梓とのファーストコンタクトだったように思う。
そして、今なら言える。

これだけは、不運すぎる俺の人生で、間違えなくツイている出来事
だったのだと。

もともと、この後保健室から教室に戻った俺が、
既に『変な奴』の称号を与えられ、クラス中から質問責めにあつた
のは、ツイてない出来事だったろう。

「どづして…どづして…こつなつたあああっ！」

Story2 『始まりは』 ～結婚して下さい～ (後書き)

テ「『どうしてこうなった』って、完全に自業自得だろ」

楽「だって可愛いんだもん」

テ「そうかそうか、帰れ」

楽「酷い!？」

何かやっちまいました。

後悔も反省もしてませんが、書き直しはあるかもしれせん。

テ・楽「ではでは、感想、アドバイス等お待ちしております」

Story 3 - 1 『中野梓の憂鬱』 さあ、行くぜー！ (前書き)

テイクンです。

やっとアニメの話に入れる……。

一目惚れ 告白 玉砕！

の瞬殺コンボから数日経ち、どういう訳か一学年の中で有名になっ
てしまった俺こと、筆南 楽です。よろしく。

今俺は、近所のスーパーで今日の晩飯の材料を買うべく、急いで帰
宅している。売り切れたら困るからな。

そうそう、言い忘れていたが、俺は今一人暮らしのような状況にあ
る。

父親が出張で海外行きになり、それにラブラブな母親も着いていっ
たという次第。

お陰様で転校してからずっとホームアローン状態である。

転勤した意味あったのか？

朝ニュースの天気予報士曰わく、今こそ晴れ晴れとしている空だが、
じきに雨が降るらしい。

遠くの空に浮かぶ不安を煽るかのような雲を眺めながら、カバンに
入っている一枚の紙を思い出した。

部活動登録用紙。

我らが懸案事項である。

どうするかねえ…。

中学時代はGHQ（Go Home Quickly、帰宅部の事だ）だったし。

それと言った特技もないし。

困った。

何？

梓と同じ部活に入ればいいだろ？

ああ、それも勿論考えたさ。確かに良いアピール手段だ。でも、

何だか最近梓の表情が暗い。

ああ、梓と俺の関係は普通だ。ただ、何度アタックしても拒否されるが。

それで、メランコリー梓さんの話だ。

新歓ライブから一週間ちよいが経過し、いい加減部登録締め切りが近づいているこの頃。

新歓ライブは素晴らしかった。

合格発表の時の人たちがいたのには驚いたけれど。

んで、それにとっても感激したという事で梓がその翌日、軽音楽部に入った。

そこからおよそ一週間。

毎日梓の顔を眺めている俺は（邪な気持ちはないぞ、俺の前の席だからだ）、日に日に梓の気持ちが見えてくるのが分かる。

気になって聞いてみたが…

【朝 教室で】

「なあ、梓」

「なに？告白なら断るけど」

「それも九割くらいあるが、それが本題じゃない」

「絶対告る気だったよねえ！それに残り一割が本題ってどついつ事
！？」

「気にするな。俺の脳は常に梓の事しか考えてない」

「それ異常だよね！？薄々思ってたけど、君変態だよね！？」

「そんな俺が残り一割でも他の事を考えたんだ、誉めてくれ」

「ヤだよ！」

「それで、本題ってのは、最近の梓の事なんだが…」

「結局私の話じゃない！」

「…最近お前、暗いよな、何かあったのか？」

「っ!……!」

「部活か? 軽音楽部で何かあったとか」

「関係…ないでしょ…!」

「でも」

「いいでしょ別に! 放つといてよ!」

「……悪い」

これ以降、梓は俺の事を避けている。明日までには仲直りしないと…。

おっと、スーパーに着いたな。気を引き締めないと。

ここから先は、戦場だ。

さあ、行くぜ!

(あまりに過酷な戦いだつたため、説明を省略)

「よくやった…俺…」

満身創痍である。

マジでこの辺のおばちゃんたち、パないっす。

ホントに凄まじい戦いだっただ。

戦果は、

卵一パック、

小麦粉一袋、

パン粉一袋。

上々だろう。

家に牛肉はあるし、今夜はコロッケだな。

家に真っ直ぐ帰ろうかとも思ったが、まだ午後5時前。疲れたし、街の方で少しだけぶらぶらする事にした。

50

デパート、本屋、CDショップ、ファストフード店。

ここは様々な店が立ち並ぶ街中。

俺は首を傾げた。

理由？

簡単。

梓がいた。

何故だ？今学校では普通に部活の時間の筈。やっぱり軽音楽部で何かあったのだろうか？

私服にギターケースを背負っている。俺と違って一度家に帰っているということだ。

ギターケースがある……。軽音楽部は確か部室にギターを置いていた。それを今持っているのは、部活にはしばらく行ってないって事か？

今朝の出来事と今の梓の思い詰めた顔の事を考えると、声をかけにくい。

少し後を尾けることにした。ストーキングなんかじゃ、ないんだからね！

そのまま梓は俺に気付かず、歩いていく。

立ち止まったのは、ライブハウスの前だった。

テ「今回を第一話にしても良かったかも」

楽「そんなことは知らん」

テ「最近、遊○王にハマってるかも」

楽「そんなことは知らん」

テ「次回は君に戦ってもらおうかも」

楽「そんなことは知「…えええええ!?!」

テ「それでは、お楽しみに」

楽「ちよつと待てーい!」

Story 3 - 2 『ストリートファイト』 ～卑怯者め～ (前書き)

バトル回。と同時に完全なるアホ回。

これ、けいおんー！じゃないよな、もう。

……気にしない気にしない！

左手首に巻いている金属製の腕時計を確かめると、時刻は5時30分を過ぎていた。もう春になった為、まだ薄明るいのが、いかんせん寒い。

しかし、立ち止まったまま、沈黙考する梓を無視して帰るのめ気が引ける。

まあ、勝手に着いて来ただけなんだけどな。

【梓 視点】

結局今日も、部活に行かなかった。

期待して入った軽音楽部は、あまり練習してなくて、どうしてあの先輩たちの演奏に感動したのか、自分でも分からない。

最近は何みながらも、部活を休んで、いろんなバンドのライブを見に行ってる。先輩たち、心配してるかな…悪いことしちゃったな…。

落ち込む原因はもうひとつ。

私の後ろの席の筆南 楽っていうやつ。出会って早々に告白してきた変な奴。悪い人じゃない。むしろ良い人だ。相変わらずの告白連発は鬱陶しいけど…。

今朝、楽と喧嘩した。

喧嘩、ではないかな？心配してきた彼を一方的に拒否しちゃっただけだし。」

怒ってるかな。

怒ってるよね。ちょっと傷ついた顔してた。

でも、これは私の問題。自分で解決しないと。

はあ…仲直りできるかな…憂鬱だな…。

その時。

ぼんやりしながらライブハウスに入ろうとした所為で、男の人にぶつかってしまった。

「あん？なんだお前」

「す、すいません！」

怖い。何だか怖そうな人にぶつかってしまったらしい。

「そつちから当たっておいて謝るだけかよ？イッテ〜！腕折れちゃったかもしれないなあ？責任とってくれよお、おい！」

「ひいつ！？」

横から更に二人くらい別の男の人が現れて、私の腕を掴む。

「や、止めて下さい！…！」

「『止めて下さい!!』だって、かわいい〜!」

「放してっ!」

「弱えな。うるせえし連れてくか」

「助け…ムグツ!」

口を押さえられ、連れていかれる。

誰か…!

【楽 視点】

急展開過ぎる。ちょっと固まっていた。

なんかぼんやりしながら歩いていた梓が、なんかいかにも悪そーな奴らに連れてかれた。許せないな。梓の彼氏（自称）として助けろ!

「よーう、お兄さん方!」

ギロっと睨みつけられる。

分かってはいたけど怖えええ!

テンパる俺!

近づいてくる不良たち!

俺のとつた行動は…

「俺の梓に手え出しやがって、ただじゃおかねえぞこの野郎！とりあえず、一発ずつ殴らせてもらおう！」

…自分でもビックリするくらいの暴言をぶつけてました。やっちまった。

当然キレる不良たち。

「んだとコラア！やんのかテメエ！」

「え、あつ、いや、そんなつもりは無いんでございませうですことよっ！？」

「うるせえ！お前ら、やっちまえ！」

「ツイてねえええええ！」

焦る俺！

迫り来る不良たち！

何か、何か打開策は…！

…あつ。

どこからか取り出した鉄パイプで殴りかかってきた不良Bの顔面に、

「これでも、食らいやが…ゴファホッ！」

小麦粉をぶっかける。

助かった。俺には珍しくツイていたな。

「お返しだっ！」

腕時計を外し、右拳で握って、顔を真っ白にして咳込む不良Bをぶん殴る。

金属で出来ている重い時計はパンチ力を倍化する。

不良Bが泡を吹いてひっくり返った。

あと2人。

【梓 視点】

急展開過ぎる。

突然楽が現れて、なんかテンパった感じで喧嘩を売って、しかも一人殴り倒した。

戦闘直前は思いつきり腰が引けてたのに、強いんだか弱いんだか。

それにしても、何でここに楽が？

【楽 視点】

BがいるならAもいるよね、なんて言わない！

まあその不良Aと戦ってるんだけどなっ！

小麦粉はことごとく避けられ、遂に無くなってしまった。

「ははは！もうこっちのものだな！連射は死亡フラグだって決まってるんだよクソガキ！」

「お前の台詞の方がよっぽど死亡フラグだよ！！」

「何っ!?!」

「はいドーン!!」

「何す…:ブバチャッ！」

無策で突っ込んでくる不良Aさんには記念品（生卵）の贈呈（顔面当て）です。

黄身と白身でヌルヌルして殴ったら滑りそうだな…:そうだ！

「こんの、クソガキ…:フバッ！」

パン粉かけました。

「さて、一つだけ言わせる…」

目の前の、衣を纏ったコロツケ顔を…

「だーれがクソガキだああ！」

殴る！

「怒るポイントそこかヨ：グハアッ！」

吹っ飛ぶ不良A。

哀れ不良A。まともに喋れたの2回だけだったな。

さて、あと一人だな。

「おい、お前。いい加減観念したらどうだ？」

こんな台詞を吐きつつも膝がガクガク震えてるのは内緒。

「はっ。こいつがどうなってもいいのかよ？」

「！」

定番中の定番だ。あいつ、ナイフなんか出して梓を盾に逃げるつもりらしい。

「この…卑怯者め」

俺は銃を取り出した。

「ええええええええええ！？銃？そんなのあり！？そっちのほうかよほど卑怯じゃねえか！！」

「俺の辞書に『卑怯』なんて言葉はない！」

「言ったよなあ！お前さつき『卑怯』つつたよなあ！」

「バーン」

「うおおおおお！？やめろ口真似！怖えんだよ！」

「3分間待つてやる」

「ム○カ大佐か！！どっちが悪役だよ！！」

「……………（パァン）」

「撃ちやがったああ！？三分待てよチクショー！」

不良Cは梓を放して逃げ出した。怪我がないか心配だが、その前に、

「待てええええええええ！」

逃がしてたまるか。
お前だけは許さん。

しかし、銃を前にして完全に勝ちを諦めた奴は、速い。
止まる気配がない。まあ当たり前か。

よし、それなら…

走る不良Cの足元に銃を投げた。

「え？」

さっきまで自分を脅かしていた武器が自分の足元にあるのだ。
使わない手はないだろう。

そして、混乱しながらも銃を持ち上げ、

気付く。

「……軽…い？」

「そうだ、軽いだろ？」

足を止めた奴の目の前に立つ。

「プラスチック製なんだ…音だけ鳴るオモチャなんだよ」

「チッ！」

不良Cが銃（笑）を投げ捨てる。

「じゃあもうお前は丸腰じゃねえか。勝つ気か？おい」

「ああ。一発殴らせてもらおうって言っただろ？」

「この…舐めやがって、ガキが！」

向こうから来てくれる。好都合だ。

「フルボッコにしてく」「バーン」「うおおい！！」

条件反射的にビビっている。

隙あり。覚悟しろよ。

「必殺、彼女いない歴〃年齢で初恋の女子に音速で振られた筆南
楽による愛の力を甘く見るなよ梓やっぱりお前のが好きやねん
パーンチ！！」

「ぐはあっ！！…ッッコミどころ多すぎ…る…ガクッ」

俺の愛と怒りと悲しみ(?)を十二分に込めた全力の拳は、不良C
を5、6mぶっ飛ばした。

…俺、すげえ。

テ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

楽「○ね。もう一度言う。○ね」

テ「仕方ないだろ！僕はアホなんだ！」

楽「頭上げんな！言い訳するな」

えー、今回は本当に申し訳のない話になってしまいました。

結局解決もしませんでしたし、

スムーズに戦闘が進まないし、

正直この回必要ないし（爆）

次回までにはしっかりと鍛えておきます（文章力とか頭とか）ので、

こんな駄作でも、読んでくださる読者の方々、

次回も、お楽しみに…？

Story 3-3 『何か』 くっくむな (前書き)

珍しくシリアス？

それでもギャグは欠かさない。

Story 3 - 3 『何か』 くツツコむな

不良三人を瞬く間にやつつけた俺は颯爽と、座り込んでいる梓のところに戻る。全く、余裕だったな。

「梓、大丈夫か？」

「……」

返事がないな。

まだ怖がつてるのか？

「…楽」

お、返事した。

はい、何でしょう？

「あのねえ……」

俯いていた梓が顔を上げる。ゆるっくりと。

梓さん？怖いですよそれ。

前髪が顔にかかって可愛い目が見えな痛い痛い痛い！

「こんな所でなに人の名前大声で叫んでくれるのかな、ねえ？ねえねえねえ？」

あああああ！

腕はそつちに曲がらない！
脚はそつちに動かない！
首はそんなに回らないいいいい！！

路地裏に、一人の男子高校生の断末魔が、響き渡った……

B A D E N D ……

死んでないよ！

死にかけたけど！

その後、ツインテールを逆立て怒り狂う梓に、何度も土下座して謝り（プライドなど捨てた）、なんとか許して貰い、今に至る。

「マック行こう、マック」

えーと、それはつまり……？

「奢ってね」

「ですよー」。

気がつけば目の前には美味しそうな香り漂うファストフード店の建物。

その名は、

マック……スバーガー」。

あるえ？

「マックスバーガー？」

「？マック知らないの？」

「てっきりマクナルドだと」

「ああ、そっちね」

そっち！？二択なのか！？

「むしろマクドナルドしか知りませんでしたよ私は！」

「そう？全国チェーンのはずなんだけど」

俺だけなのか、知らないのは。

まあいいや、入ろう。

「いらっしやいませ」

凄まじいスマイルオーラがレジ員さんから迸っている。

「お持ち帰りですか？それとも店内でお召し上がりですか？」

店内で良いよな？

梓はお持ち帰りしたいが。

メニューを差し出される。どねどね。

ハンバーガー

チーズバーガー

ビッグマックス

！？

「どうしたの？」

梓が心配そうにこつちを見ている。

「大丈夫だ、なんでもない」

ちょっと違和感が合ったただけだ。

「そう？じゃあ私はビッグマックスセットで」

なんか気になるが、我慢。

結構高いもの注文されたが、我慢。

「お飲み物は？」

「コーラで」

「氷はどうかございますか？」

…氷？

「氷なし、普通、」

まさか。

「氷マックスがございしますが」

やっぱりかあああああ！

駄目だツッコむな、耐えるんだ…。

「氷なしで」

「かしこまりました。そちらのお客様はご注文はお決まりですか？」

「えーと、」

どうするかな。

セットは高いからな。

「じゃあ、ハンバーガー2つと、」

マック『ス』が付く商品は買いたくないな、なんとなく。

「アイスコーヒーで」

「氷は」

「普通でー!」

「はっ、はい!」

つい怒鳴ってしまった…。

「…コーヒーは2種類ございます」

ほう。

「プレミアムロース コーヒーと」

ツッコむな…っ! 耐える俺…。

それ本家(?! マックの商品だとかツッコむなっ…。

「マックスコーヒーがございます」

うおおおおい！

それと同じ名前の商品知ってるぞ！

黄色い缶のめっちゃ甘いコーヒーだよな！！

「いえ、あちらはM O X コーヒー、こちらはマックスコーヒーです」

聞いただけでは違いが分からんのだが！？

「もういいや、プレミ（ryで」

「かしこまりました」

二人分のプレートを落とさないように持ち、既に梓が座っている席まで持つて行く。

「自分の分くらい持って欲しかったな…」

「何か言った…？」

「いいえ、なんにも！」

怖いよ…。

ハンバーガーを食べながら、本題に入る。

「ところで梓」

「何？」

「付き合ってくれ」

「却下」

「ところで梓」

「…何？」

「部活で何かあったんだろ？言ってみるよ」

「……関係ない」

「ある」

「それは、自称彼氏とやらの立場から？それともクラスメートの立場から？どっちにしるほつといてよ」

「ぼ…俺は、目の前にいるのがどんな人であろうと、困ってる奴は助ける」

「……」

「例えば。さっき連れて行かれそうになったのがお前じゃなくても、俺は助けた」

「立場とか、そんな事じゃなくて、俺はどんな状況であろうと、誰か一人でも悲しんでいる奴がいるのは見たくない」

「なあ梓。つらいんだろ？どうすればいいか解らないんだろ？人間はそんなに頑丈に出来ちゃいない。

解らないことは、聞け。

一人で考えるのに行き詰まったら助けを求めろ。

聞かせてくれ。

何があつたんだ？」

「……」

駄目か……。

「……実は」

おっ！やっと心を開いてくれたか。

「これ……」

紙？

ラブレター……じゃあなさそうだな。

中見ていいか？

コクンと力無く頷く梓。なんか罪悪感が。

「これは……退部届？」

「……」

ああっ！

そんな泣きそうな顔しない！

何があつたの？

ほらほら、楽お兄さんに言っつけてもらいなさい。

「…クスッ」

笑つた？

よし来た。

「実はね……」

(中略！)

【梓 視点】

「ナルホド……」

しばらく考えていた楽が呟く。

「真面目な軽音楽部だと思つたら、お茶ばっか飲んで練習してない

ダメな部だったと」

「……うん」

でも、新歓ライブの感動が忘れられなくて、それがなんでか解らなくて…。

「…そう…だなあ」

「何か解った？」

「いや、全く」

がくつ。楽だけに。

「そもそも俺とお前じゃ感性が違うし、音楽知識の差もある。どうして感動したかなんて解るわけ無い」

少しイラッとした。

「解決して、くれないの？」

「俺には無理だな」

何それ。

信用した私が馬鹿みたい。

「もういいよ、ありがとう」

やや棒読みで言い切る。

「おい待て。俺『には』無理って言ったが、他の人なら出来るんだ
「よ」

「…?」

「軽音楽部の人たちにきいてみな」

えっ!?

無理無理無理!

こんなに休んでるのに。

「だが、お前が感動したのは、その軽音楽部の演奏なんだろう?他のバンドからは感じられない『何か』があっただらろう?」

…確かに、そうだ。私はあの演奏に音だけじゃない、別の『何か』を感じたんだ。

「だったら、きいて来い。答えを聞いて来い。お前を動かした音楽を聴いて来い」

「……うん!」

「よし」

楽は満足したように頷くと、手をつけてなかったコーヒーのカップにストローを差し込み、

ガリッ

「!?!」

液体ならざる音がした。

楽が恐る恐るカップの蓋を取ると、

「なんじゃこりゃ!」

大量の氷がギツシリと詰まっている。

見た目、氷9割、コーヒー1割。

これは…

「これが氷マックスかつ!?!頼んでないぞ!」

さっきの注文の時に楽が怒鳴ったせいでレジ員さんが入力ミスしたんじゃ…。

「マジですか!?!ツイてねえ…」

そう言いながらもコーヒー氷をガリガリと噛み砕く楽なのであった。

【楽 視点】

翌日。

昨日の氷のせいで何やら腹から嫌な音がするのを無視し、遅刻寸前に学校に到着すると、すでに到着していた、真剣な顔をした梓がい

た。

「よう」

「あ、おはよう」

「凄いくまだな」

「緊張しちゃって…」

「大丈夫だ。あの先輩たちならきっと待ってる」

「…うん」

放課後。

軽音楽部が部室として使っている音楽準備室。

そこからは、とても暖かい音楽が流れていた。

ちなみに俺は今、その音楽準備室のドアの前で聞き耳を立てております。

何、変態？失礼な。俺は梓が心配なだけですよ。

演奏に混じって、語りかけるような優しい声が聞こえた。

「…前に、なんで私が外バン組まないか聞いたよね？」

「やっぱり、私はこのメンバーでバンドをするのが楽しいんだと思う。きつと皆もそうで…だから、いい演奏になるんだと思う！」

！…これなら、大丈夫だ。断言できる。

この軽音楽部は、本物だ。

「さ、一緒にやろう！梓！！」

「…はい！」

…いい話だったな。

うんうん、梓は軽音楽部に無事入部出来そうだし、軽音楽部も新入部員獲得、と。

「さて、と……」

一件落着。

ハッピーエンドに満足した俺は扉から耳を離し、背を向ける。

そして

「あ！教室に弁当忘れてた！」

「こら、唯！走るな、危ないぞ」

ドタドタ、ガチャン、ドン！

「きゃっ！？」

「うおっ！？」

足音、ドアの開閉音、衝撃。

誰かぶつかったようだ。

俺の背中に。

勢い良く。

この音楽準備室。実は階段の上にある。

解るな？

Free fall…

（ 綴り合ってるか？ ）

前のめりになってバランスを崩す。

無駄に振り回した両腕はなんの意味も為さず、

階段の、凶器にするにはもってこいの90°の角が俺の視界いっぱいに広がり、

意識を失った。

Story 3-3 『何か』 シツコむな〜 (後書き)

楽「チーン

テ「……」 シンシン) つついてます)

楽くんが気絶してるので雑談ナシ。

それでは次回もお楽しみに。

感想、お待ちしております！

シリアス…だったよね…？

お待たせしました。やっと完成しました。
そのくせして相変わらず短いです。

ではごっげ。

ザアアア...

雨が降っている。

土砂降りだ。

また夢であるようだ。

今俺は音楽準備室階段下で無様に転がっているはずだ。

ここは、公園だ。

引越して来る前の街の公園だ。小学生の頃ここでよく遊んだな...

だがこれは夢だ。

今の俺は桜ヶ丘に住んでいる。

「ふむ」

誰もいない。

雨だからか。夢だからか。

「...」

...

「.....」

.....。

……なんでよりによってここにいるんだろ、俺。

その時。

後ろから声をかけられた気がして、振り向こうとし、

「眩しっ……」

「おわっ!?!」

目が覚めた。

変にリアルな夢だったな。懐かしい場所だったし。

さて。現状把握。

今驚いたのは、……えっと……このデコの特徴的な……誰だっけ？

「人の顔みて頭抱えるってどういう事だっ!?!」

スルー。

ここは……入ったことの無い部屋だが……？

俺は自分の天才的発想力を使い、一つの結論に達した!

それは……

「続きはWebで」

「何がだよっ!!」

またツッコまれてしまった。何なんだこのデコの輝きは。眩しいぞ。

「…んで、大丈夫なのか？思いつきり頭打ってたけど」

「筆南楽筆南楽筆南楽俺は天才筆南楽…大丈夫です」

「色々ツッコミ入れたいけど…って！お前、楽か！」

「どうしてそれを！？エスパー？」

「今連呼してたじゃん!!」

「それもそうだ…って！あんだ、律さんか！」

「どうしてそれを！？エスパー？」

「今連呼してたじゃん!!」

「してないよ！」

【梓 視点】

もう、ツッコんでも…良いよね？

階段下でうつ伏せに転がっている楽を軽音楽部部室のソファに運んだ後、ムギ先輩と澗先輩は氷を取りに（澗先輩は逃げたのかも）、唯先輩は忘れ物を取りに行った。

そして、私と律先輩は留守番。

律先輩が、大丈夫かなこいつー、とか言いながらつついていたら、急に楽が起きた。

で、漫才中。

騒いでいる二人に近づき、軽くチョップした。

「「あいたっ!?!」」

同じリアクションを返す二人。

「何すんだ先輩に向かって〜」「あ、すみません」

律先輩に謝る。

「これはこれは愛しの梓じゃないか」

「……………」

楽には無言でチョップ（強）連打。

「痛い痛い、痛いから!」

「……………（ニコニコ）」

「なんか楽しくなってきたくない!？」

【楽 視点】

二分後。

見に覚えのない理不尽な暴力を頭蓋に受け続けた俺は、心身ともにぐったりとして、その当事者である梓様にひたすら痛い頭を下げていた。

「ごめんなさい、梓様!もつしません!」

「……………何を?」

「…えつと…」

「やっぱり自覚なしなあ!」

「痛い痛い!律さんは黙って見てないでバイオレンス梓さんを止めて!」

と、ギャーギャー騒いでいるうちにドアがガチャンと開いた。

「忘れ物取ってきたよ」

救世主だ!!

「助けて下さい、えっと…唯さん。あそこにいる黒髪ツインテールの俺の嫁に殺されそうなんです！」

「にゃーっ！！誰が嫁かーっ！！」

「事情はよく分かんないけど助けるんだよ！ふんす！」

その気合はよく分かんないけど有り難いですよ！

唯の攻撃！

『ハグ』

梓は身動きが取れなくなった！

唯の攻撃！

『いい子いい子』

梓の戦闘意欲が0になった！

唯は勝利した！

「ありがとっございます唯さん！そして羨ましいー！」

「うふふ、あずにゃん可愛いよね」

「はい、実に可愛いですね…、ん？あずにゃん？」

新キャラクターの登場に焦る俺。誰だそいつは。

「あずにゃんはね…」

「氷持つてきましたよ、あれ？楽くん起きてる」

「ひい！起きてる！？怖い怖い怖い…」

ムギさんと澪さん帰還。俺を見るや素早くムギさんの後ろに隠れる澪さん。

俺、何かしましたか……？

【律 視点】

なんだか私が空気になっている！と思ったら澪とムギが帰ってきた。

なんだか澪は怯えてるし、梓は唯に抱きつかれたままだし、その唯はたんこぶが出来てる楽に拝まれて照れてるし。

よし、ここは部長の私がまとめなくては！

「みんな！」

5人の視線が一斉に私に向く。何これ緊張する。

「えっと…お茶にしようぜー」

みんなで喋りながらお茶を飲んでくつろぐこの時間。
梓の一件もあり、しばらくティータイムを取っていなかったが、や
つぱりこうでなくちゃな！
この紅茶がないとやってられない。

「ムギ、おかわり〜」

「はい」

「いやあ、美味しいですね」

と、楽。

「だろ〜！ウチの名物だっ！」

「本当に素晴らしいんです、が、」

「どうしたんだ、不満があるのか？」

「皆さん立派なカップ使ってなんで俺だけ湯飲み？」

確かに楽のは湯飲みだ。しかも寿司屋で出てくるネタが書かれたやつ。

「ぷっ…贅沢言わない」

「っ……じゃあもうっ」

「なんだよ」

「なんで俺だけ空気椅子？」

席が足りないので物置を探したのだが机しかなかったのだ。

「贅沢言わない」

「贅沢じゃないよ！？大体そこに椅子余ってるじゃないですか」

指をビッシと指した先にはさわちゃんの席。

「悪いことは言わん、やめとけ、呪われる」

「なんだって!?!」

「ひい！呪われる!?!」

空気椅子のまま器用に驚く楽。

呪いに反応して律儀に怖がる漣。

面白いな、からかうか。

「そっだぞっ漣。その席に座ったものは一週間後にさわちゃんと同じように……」

「同じように、どくなるのかしら？」

「小ジワが増えて、老化を感じるようになって痛い痛い痛い！」

「だーれーが一年増よ！」

「そこまで言っていないよっ！！何時来たのさわちゃん！」

さわちゃん登場。

「今来たところよ。あ、ムギちゃん私レモンティーね」

はああ、とだらしないうめ息をついて席に腰掛けて、

楽を発見した。

「誰！？空気椅子のつらさに膝を震わせつつ、寿司屋の湯飲みで優雅に紅茶を飲むこの子は誰！？」

具体的説明ありがとう、さわちゃん。

「ああ、えっとこいつは筆南 楽って言って、ここにいる訳は、」

あれ？楽が階段落ちたから助けたんだよね……。

じゃあなんで楽は階段の上にいたんだ？

その場にいる全員が同じ疑問に達する。

6人の視線が未だに空気椅子を続ける楽に集中した。

「え…ええつと…」

視線が強くなる。

「あゝ、…続きはWebで…?」

「…何が(だ)よっ!!」「…」
激しいツッコミが音楽準備室に響いた。

テ「出来た……」

楽「スランプに、宿泊に、宿題片付けで、…やっと完成か」

テ「なあ…もう空気椅子止めていいんでない？」

楽「いや、もう少し頑張る」

Story 4-2 『成り行きからこつなつた』 ～素晴らし～ (前書き)

遅れましたすいません。長い謝罪は活動報告の方でします。ではどうぞ。

Story 4 - 2 『成り行きからこつなつた』 素晴らしい

マズい。これはマズいぞ。

このままでは俺は変態扱いされてしまう。

最も、既に一学年の間では変な人として扱われている俺だが。それでも、これ以上変人及び変態扱いされるのは本意ではない。

……。

助けて梓！

楽から助けを求めるような視線がチラチラと……。

一応恩返しはするべきだよな。私が軽音楽部で頑張ろうって思えたのは楽のお陰でもあるし。

……勘違いしないでね。『恩返し』だからね。別に楽のことが好きになった、とかそういうことでは、ないんだからね！

……ツンデレじゃないよ！いや、違うから、本当に！

梓が葛藤している……？

俺がヘルプサインを送ってから、梓がうんうん唸り始めてしまった。

ちょっと梓さん？

ダメだ、アイコンタクトが出来ない。

すると。

今まで考え込んでいたようすの律さんが口を開いた！

「楽！」

「はい？」

「解ったぞ、この事件の犯人が！」

「俺ですね。コロンくんみたいに言わなくて良いです」

「解ったぞ、この事件の真相が！」

マジで？

ムギさんキーボードでBGM奏でなくて良いです！こんな所で小学生探偵に追い詰められる犯人の気持ちを知りたくなかった！

「楽！お前が扉の前にいた！その理由は！」

「！」

「あたし達の「ちょっと待ったあ！」

梓さん復活！助かった。

「どうした梓？」律さんが聞く。

さあ出るぞ、名探偵アズサの衝撃の推理が！

「……楽は、軽音楽部に入部したいんじゃないでしょうか？」

何っ!？

「そうなのか？楽」

「えっいや、」

「そうなのか！やったぞ、新入部員2人目ゲット〜！」

「えっ」

「やったね、りっちゃん！」

「えっ」

「怖い怖い男の子怖い……」

「えっ」

「うふふ……」

「えっ」

「やっぱりここで食べるケーキはおいしいわね……」

「えっ」

知らないうちにどんどん話が進んでいた。

律さんと唯さんは椅子から立ち上がってくるくる踊ってるし。

澪さんは椅子の上で体育座りしながら震えてるし（パンツ見えてますよ！）。

ムギさんは静かに笑ってるし（あなたは全部分かってそうですね！分かった上で笑ってますよね！）。

さわ子先生はレアチーズケーキに夢中だし（本当に顧問かこの人！？）。

誰か話聞けよ！

「あ、あのです…むぐっ！」

「（シート！楽は黙ってて）」

「むぐっ？むぐぐー！（ええっ？でも）」

「(いいから!こうでもしないと楽はただの不審者だよ?)」

「……………むっぐぐー(……………納得いかなー)」

梓が俺の口を手で押さえながらこそこそと話す。何故むぐむぐだけで話が出るのかは謎だ。

……………!

……………待てよ。今俺の口を塞いでいる梓の(小さくて可愛い!)手は今までに何度も梓の口にも触れているはず。つまり!

俺は!今!梓と!間接キスをしているツツツ!!

「(ちょっと?楽どうしたの?)」

高速回転し始めた俺の思考は止まらない。

軽音楽部に入部する。

梓といる時間が増える。

何かしらで今みたいに梓と間接キス出来るかもしれない。

いや、出来る!

ゴールイン!

これだ!

ガタン、と椅子から立ち上がる。その拍子に口から梓の手が離れてしまったが、どうせこれからも出来る、問題ない。

「……素晴らしい。素晴らしいよ」

「楽？さっきからどうしたの？」

「……素晴らしいよ軽音楽部っ！ぜひ入部させてもらいましょう！」

「楽が良いなら良いんだけど……」

そつと決めれば、と鞆から出した入部希望用紙に『軽音楽部』と書き込み、顧問……は頼りないから律さんに渡した。

「はい、確かに預かりましたっつと」

「じゃあ、明日からよろしくお願いします」

こうして俺は、軽音楽部に入部することになったのであった。

帰宅後。

夕飯のカレーの支度をしていると。

ブブブ、ブブブ。

マナーモードに設定している携帯がテーブルの上で震えていた。

「ん。先輩方からだ」

まず律さんから。

『明日からよろしくな！ところで楽は楽器は何にするんだ？ま、それも明日ってことで！』

楽器かあ……。考えてないとな。

次は唯さんから。

『明日からよろしくね。あ、そうだ！軽音楽部は、カスタネットとか口笛みたいな、軽い音楽をする部ではないからね、注意！』

……。そんな間違いしません。

ムギさんから。

『梓ちゃんも楽しくんも入って、部活が賑やかになって嬉しいです。』

明日からよろしくね〜』

はい、よろしく願いします。

そして、漣さんから、なのだが……。

『軽音楽部に入ってくれてありがとう。明日からよろしくな。私は』

……私は、何なんだ!?

すると、漣さんからもう一通メールが。

『ごめん、さっきのメールの最後は間違えた。緊張しちゃって。私、人見知りなんだ。って、何言ってるんだ私は。』

……心の声ただ漏れですがな。

またメール。

『さっきのは本当に間違えた!いや、人見知りは間違ってたないんだけど、削除しようとしたやつを送っちゃったんだ。ええと、とにかく、明日からよろしくお休み!』

まだ7時過ぎですが……。

なんだか終わらなくなる気がしたので、漣さんに、

『ありがとうございませす。明日からよろしく願いします^^』

と送った。

……それにしても緊張しすぎだろう。

ブブブ、ブブブ。

「ん？梓からか」

先輩方一人一人に返信し、カレーをパクついていると次は梓からメールが。なんだろう、愛の告白かな。

『昨日はありがとう。お陰で先輩たちと仲直りできたし、楽には感謝してる。』

『デレましたよ！梓さんから貴重なデレ頂きました。』

『ただし！部活で抱きついてきたり、突然告白したりしないでね！したら』

『先輩たちに今日楽が部室前で盗み聞きしてたって、言うからね』

「そりゃあないよ！梓さあああん！！」

筆南家に、俺の悲しみの叫びがこだました。

Story 4 - 2 『成り行きからこつなつた』 素晴らし〜 (後書き)

ここからは考えてあるのですぐ進む、といいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4414u/>

けいおん!! ~Unlucky? but Happy! ~

2011年12月11日21時51分発行